

## 豊穡の大地から 働きあい生きあい たつか一むの挑戦(壮瞥町)

さまざまな事情を抱えた人が寄り添って、農業をしながら暮らしていく。人と農業の循環を実現する、「たつか一む」の営みとは――。

洞爺湖にほど近く、煙たなびく昭和新山を眼前に望む壮瞥町立香(たつか)地区。「みずから生活の糧を作り、障害があるかないかにかかわらず、対等に暮らせる社会を創ろう」と、昭和62年前に「農場たつか一む」は産声を上げた。

畑と家畜と人間とが循環する農業をめざし、その足がかりとして平飼い養鶏を手がけて、毎週100戸近い消費者に卵を宅配する。

「卵を介した結びつきで、わたしたちの願いが確信になりました。『卵かけご飯がおいしい』『アトピーの子にも安心して食べさせられる』など、ありがたい評価をいただいています」

たつか一むを切り盛りしてきた、代表の高野律雄さん(60)は自信をのぞかせる。

### 有畜複合 福祉型の農業へ

養鶏の責任者は、妻の利志子さん(59)だ。集めた卵をかるくたたき、その音でひびの有無を判断。手際よく選別作業が進んでいく。

「わたしは卵を厳しく選別しますし、冬場は鶏の産卵率が落ちるので、注文に応じきれないこともあります。でも、わたしたちは、卵でもうけようとは思わなかった」

傍らで作業を見つめる律雄さんは、「そうだよね」とうなづいた。

静岡県出身の律雄さんは、大学で心理学を専攻し、卒業後は埼玉県にある国立の保護指導員養成所で学んだ。同級生だった利志子さんとは、既存の施設にはなかった方法で、障害のある人もない人も支え合って生きよう、と意見が一致。

「農業を選んだのは、食は人間生活の基本だからこそ、安全・安心なものを作りたいと思ったからです」

高野さん夫妻は、東京都内で児童福祉の仕事をしてながら農場ができる環境を探した。利志子さんの実家が伊達市だったこともあり、昭和61年に隣の壮瞥町に移住。学習塾を開設



する一方で農家に通い、養鶏や野菜作りを学んだ。

そしてその翌年、念願の離農跡地2ヘクタールを取得して新規就農。「農場たつかーむ」を設立したのだ。当時のスタッフは夫妻を入れて3人。50羽の平飼い養鶏と、有機農業によるスタートだった。

「設立当初から有畜複合を続けています。養鶏は大動物よりリスクが少なく、小規模でもできる。わたしたち自身が『おいしい』と感じ、自分の子どもたちにも安心して食べさせられるので、やはり有機農業でした」

と、律雄さんが力を込める。

その後は離農跡地の購入や借地によって徐々に規模を拡大し、現在の農地はおよそ12.5ヘクタール。4,000羽の鶏を飼い、野菜や豆類など約20品目を作る。平成18年には「合同会社たつかーむ」として法人化。農場で働くスタッフも、40人まで増えた。



農場で高野律雄さん(右端)と「たつかーむ」のスタッフたち

誇る平飼い養鶏は、規格外のコムギやダイズ、デントコーンサイレージなど、基本的に道産飼料。青草もふんだんに食べさせる。鶏ふんは発酵肥料にして販売し、家庭菜園用に人気がある。

スタッフのうち、30人は障害を抱える人だ。利益は追求せず、農場を「良質の食料生産の場」「労働の場」と位置づけ、だれもがいっしょに働ける福祉型農業をめざしてきた。

生産物や加工品は道内のスーパーや北海道有機農業協同組合、地元の学校給食センターなどに供給しながら、ネット販売にも取り組んでいる。道内有数の規模を

## 立場の弱い人と暮らし、信頼関係を深めていく

運営においては、福祉関連の支援システムも活用してきた。農場メンバーや地域の福祉サービス充実のために「NPO法人サポートセンターたつかーむ」を16年に設立。一般就労が困難な人を対象にした、就労支援事業所の指定を受けた。農場とNPO活動が一体となり、経済・社会的に自立できる環境が整った。

「公立の施設などには多額の支援金が交付されますが、個人には回りません。障害者の自立には資金が足りないのです、活用できる支援制度はすべて導入しました」(律雄さん)

農場の給与が道の最低賃金より高いこともあり、たつかーむで働き続ける人も多い。

「今後は引きこもりやシングルマザーなど、社会的に弱い立場の人にも支えていきたいですね。これまでの経験も踏まえ、生産から加工まで手がけたい」

と、律雄さんは夢を広げる。

農場の生産物を使ったレストランと加工施設を建設する計画も進んでおり、「有機」にこだわる客層を呼び込みながら、惣菜や焼き菓子などを製造・販売すべく準備中だ。

利志子さんは、自分たちの歩みを振り返る。

「好きで始めた仕事なので、苦にすることなく続けてこられました。とてもいい半生だったと思いますよ」

まだ有機農業が“勇氣農業”と揶揄されていた20数年前、いち早く農薬や化学肥料を使わない有畜複合経営に取り組んできた。卵や野菜の宅配などをおして、消費者との顔の見える関係もできている。

直近の話題として、TPP(環太平洋連携協定)にたいする律雄さんの思いを聞いてみた。「参加すれば、200%近い北海道の食料自給率は守れなくなる。直売などによって消費者との関係を強めていくしか、北海道農業を持続する方法はありません。一人でも多くの理解者を増やしながらか、TPPに対抗します」

社会的に弱い立場の人と共に暮らし、実績を重ねてきただけに、力強い決意を示してくれた。



※働きあい生きあい たつかむ〜就労支援の多機能型事業所「合同会社農場たつかむ」と、「NPO法人サポートセンターたつかむ」の両輪で運営される。両法人のメンバー合わせて約70人のうち、農場部門は40人ほど。平成13年に有機JAS認証を受け、有機農産物の圃場も広げている。住所／壮瞥町立香92-9

☎ 0142-66-3345

FAX 0142-66-3344

ホームページ <http://www.tatukam.jp/>